

2022年度 群馬大学共同教育学部  
学校推薦型選抜・帰国生選抜問題

特別支援教育専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め5枚、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

## 特別支援教育専攻 小論文

### 【問題 1】

以下の文章を読んで、文中傍線部分にある「貧しい異文化接触」に関する2つの問いに答えてください。

(問 1) 「貧しい異文化接触」とはどのようなことを指していますか。文中の言葉を使って60字以内で書いてください。

(問 2) 障害のある子どもに対する働きかけが「貧しい異文化接触」にならないためには、教師として子どもたちにどのように接すればよいでしょうか。また、あなたの考えるそうした働きかけを行うためには、大学4年間でどのような学びや経験をすることが必要でしょうか。以上2点について、400字以内で書いてください。

我が国でも、1995年に「ろう文化宣言」と題する一文が木村晴美、市田泰弘両氏によって発表され、大きな反響を呼びました。その冒頭は、次のように書き出されています(『現代思想』第24巻5号、1996年、青土社に再録)。

「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」—これが、私たちの「ろう者」の定義である。

これは、「ろう者」＝「耳の聞こえない者」、つまり「障害者」という病理的視点から、「ろう者」＝「日本手話を日常言語として用いる者」、つまり「言語的少数者」という社会的文化的視点への転換である。このような視点の転換は、ろう者の用いる手話が、音声言語に比べて遜色のない、“完全な”言語であるとの認識のもとに、初めて可能になったものだ。

ろうの人たちが手話を使うことは、いまでは誰もが知っていることですが、一般にはその手話を耳が聞こえないためやむなく編み出した「不完全な代替品」にすぎないと考えている人がほとんどです。そうした一般的な認識に対して、じつは手話は耳の聞こえる者たちの音声言語とまったく対等なもう一つの「完全な言語」なのだと主張し、そのことによって手話を軸に作りあげる自分たちの生活を、もう一つの文化として打ち出していく、この発想の転換には目を見張るものがあります。

この宣言はこう締めくくられています。

この日本で、「ろう者の用いる手話は、音声言語に匹敵する、複雑で洗練された構造をもつ言語である」ということが、本当に理解されるのはいつのことであろうか。私たちは最近、それはそれほど遠い日のことではないかもしれないと思うようになっている。手話に関わる聴者にも、また手話を知らない一般の人々

の中にも、デフ・コミュニティからの声に耳を傾ける人々が、少しずつ増えてきている。ろう者自身も、自信と誇りを取り戻しつつある。ごく近い将来、ろう者と聴者が本当の意味で出会い、対等な立場で向き合うことのできる日が必ず来ると、私たちは確信している。

手話ということばを軸に形成されたろう文化の世界、それがデフ・コミュニティだと胸を張って言うその主張のなかに、私は、ろうの人たちにとどまらず、あらゆる障害の問題に通じる視点の転換を読みとることができるように思うのですが、どうでしょうか。

ただ、ろうの人たちの場合、耳が聞こえないという同じ条件を背負ったものどうしが、手話という共通のことばを生み出して、強固なコミュニティ(共同体)を実体的につくりあげています。その点、ほかの障害では、たいていのばあい、このような実体的な共同体をなすような文化形成ができていないわけではありませんから、これと同じ意味で文化を論じることができないのはたしかです。こうした差異を承知したうえで、なお、なんらか障害を背負って生きる人たちの、その生きるかたちのそれぞれを、その人たちの文化としてみることはできないだろうか。私はそう思いはじめています。

文化とは、いわば生きるかたち。私たちは、それぞれ私たちが背負った条件のもとで、それぞれの生きるかたちを作りあげています。したがって背負った条件が異なれば、当然にして生きるかたちも異なってきます。耳が聞こえないという条件のもとで、ろうの人たちが作りあげる生き方がろうの文化だとすれば、たかし君がその背負った条件のもとで周囲の人たちと作りあげている生き方も、また彼の文化だと言っていいはず。そして私が私自身に与えられた条件のもとで、いま生きているこのかたちも、彼らのそれと対等な私の文化だということになります。

そうは言っても、文化というのは空気みたいなもの、そのなかに生きていると実態がよく見えません。むしろ異文化に接触することで、はじめて見えてきたりするものです。ただこの異文化接触をそれとして味わうためには、まずはともかく障害を単に治療や訓練、教育の対象にする姿勢を横において、それを彼らの生きるかたちとして見る必要があります。というのも治療や訓練、教育も一種の異文化接触ですが、どちらかと言えば一方的で、貧しい異文化接触になりがちだからです。

じっさい、障害を治療するとか克服するという考え方は、この文化の視点から見たとき、障害をもたない人たちが、障害をもつ人たちの生きるかたちを、強引に自分たちの側に引き寄せ、同化させようとするにひとしいものになりかねません。同化と言えば、かつて日本は韓国・朝鮮を侵略し、そこの人々をひたすら日本の側に同化させようと日本語を押しつけ、天皇崇拝を押しつけてきた、そうした侵略的同化にその典型例をみることができます。この比喩は少々過激かもしれませんが、もし治療や訓練にこの同化的な思想がひそんでいるとすれば、この種の異文化接触から豊かな実りを期待することはできません。

出典：浜田寿美男（2009）障害と子どもたちの生きるかたち。岩波現代文庫。38-42頁。

（出題のため一部を改変）

【問題2】 以下の文章を読んだうえで、次の2つの問いに答えてください。

(問1) 文中下線部「他者が真に上達することを意図した教示行動へと発展」とは、幼児における教示行動がどのように発展したことを指しますか。100字以内で答えてください。

(問2) あなたは小学校低学年の担任であったとします。「相手の気持ちを踏まえたうえでの関わりがなぜ必要であるか」について、あなたは子どもに対して、どのような環境や活動場面を作り、どのように教えますか、あなたの考えを600字以内で述べてください。

「何のため」に心を理解するのか

実際の自他理解を念頭に置いたとき、特に保育や支援との関係で考える必要があるのは、「何のため」に自他の心を理解するのかという問題である。これは、保育学・教育学の文脈でいうなら目標論にかかわる問題となろう。他方、心理学研究では何らかの機能の獲得に焦点が当てられても、その機能を獲得する意味や目的が問われることは少ない。この「何のため」問題を心の理解において考えていく際、とりわけ幼児期では次の2つのことが重要になろう。

1つは、幼児は大好きな大人や仲間と心を通わせるために、相手の心を理解しようとしていることである。子どもたちがわかりたいと思うのは、会ったこともない「サリー」ではなく、仲良しになりたい友だちの気持ちであるだろう。4歳児クラスで、結婚話が盛り上がることがある。「ともくんは、だれと結婚するん?」「ぼくな、お母さんと結婚するんや」「お母さんはな、お父さんと結婚してるから、できひんねんで(できないよ)」などといったもの。それは、おませな子どもの会話というよりも、「自分には仲良しがいるかな?」といった、人との気持ちのつながりを子どもなりに意識しはじめた現れではないかと思われる。「心」という目では見えないものに気づいた子どもたちは、同じく可視化困難な気持ちのつながりに心を寄せるようになったのである。

そこで心の理解が、子どもにとって“ホットな”テーマとなる。だからこそ、社会性に課題をかかえる子どもの支援において、人とかかわるためのスキルを教える以前に、まずは安心してつながりをもてる仲間づくりに配慮する必要があるのではないだろうか。

2つ目に、他者の役に立ちたいということも、心の理解能力を発揮する目標となりえる。幼児は、1歳台から、他者を手助けしたり、必要な情報を伝えたりするなど向社会的モチベーションをもちあわせている(Tomasello, 2009/2013)。そうした行為の発展形として、知識や技能などが不足している他者に教えて、誤った行為を修正する教示行為を位置づけることができる。

木下・久保(2010)<sup>3)</sup>は、2つの保育園の4、5歳児クラスを対象に、縦断的な観察をしたところ、教示行為のエピソードの多くが、教え手となる子どもが開始したものであることを見出している。子どもが積極的に教えようとしている事実は、他の霊長類と比較してもヒト固有のものであり、たいへん興味深い点である。もちろん、子どもからの教示行為は「大きなお世話」になることもあるが、その善意のすれ違いがまた、子どもの自他理解を深め、他者が真に上達することを意図した教示行為へと発展させる

契機となるだろう。

注) 木下孝司・久保加奈 (2010) 幼児期における教示行為の発達 : 日常保育場面の観察による検討. 心理科学, 31(2), 1-22 頁.

出典 : 木下孝司 (2016) 幼児期の“心の理解” —心を理解するということが“問題”となるとき. 子安増生 (編著) 「心の理論」から学ぶ発達の基礎:教育・保育・自閉症理解への道. ミネルヴァ書房. 89-91 頁.

(出題のため一部を改変)